



西泰

箕作麟祥

譯迹

勸善訓蒙

前編

上

9  
3668  
1





紀元二千五百卅三年刻

箕作麟祥譯述

西泰勸善訓蒙

版權免許 二書房藏版

禍

國新學堂

因



惡來

福緣



善生

右西哲後格刺德之語

名古屋藩知事源慶勝書

於東京淺草和郎





泰西勸善訓蒙

緒言

一 此書原本ハ法蘭西國學士「ボンヌ」氏ノ著述ニ  
 元千八百六十七年巴勒ニテ刊行セルモノナ  
 リ蓋シ「ボンヌ」小學校ニテ兒童ヲ教育ルカ為  
 書作賅シモノニシテ西洋勸善說ノ大成完備  
 セシモノニ非サルナリ因テ其記スル所深遠  
 ニ涉ルモノ稀ニシテ專ラ解回易異ヲ述トセ  
 リ蓋シ西洋諸國ノ勸善書ハモトス然レモ其  
 一 此書多ク法蘭西國法律書及ヒ法國人ノ語等

昭和十三年  
二月五日  
購求

3036  
1



3668  
1

勸善訓蒙前編

ヲ引用スルモノ法國人ノ著述ニ係ルニ因レ  
リ蓋シ西洋諸國勸善說ノ書少カラス然レ其  
說ク所ニ至テハ概此書ト大同小異只詳略ア  
ルノミ

一書中譯字ノ妥當ヲ缺キ詞意ノ通暢ナラサル  
モノ尠シトセズ看者文ヲ以テ意ヲ害スルコ  
トナク兼テ是正ヲ加フレハ幸甚

箕作麟祥識

泰西勸善訓蒙目錄

卷之上

第一篇 勸善學ノ大旨

人ノ務

卷之中 良心及ヒ善惡ノ分別

德不徳自ラハ辭林ニ據スル

勸善ノ道唯、一ナル事據スル

第三 剛志柔志

人ノ務ノ種類

第二篇 天天三對スル務

勸善訓蒙前編

目錄

名古屋學交



敬天ノ道

天意

第三篇 自己ニ對スル務

第一款 自己ノ身體ニ對スル務

第二款 自己ノ精神ニ對スル務

卷之中

第四篇 人ニ對スル務

第一款 公道ヨリ生スル務

私鬪

盜奪

第五篇 背信

遺失物ヲ見出セシ時ノ務

契約ヲ守ル可キ務

誹謗讒誣

虚誕

誓詞

慎重

好奇ノ意○書ヲ開封スル事

踐約

顧恩



忘恩

私欲

第二款 仁愛ノ務

施恩

好意

復讐

第三款 無生物ニ對スル務

第四款 有生物ニ對スル務

卷之下

第五篇 族人ニ對スル務

目録

夫婦相互ノ務

親ノ務

子ノ務

師傅ニ對スル務

兄弟相互ノ務

兄弟ト姉妹トノ務

族人相互ノ務

老輩ニ對スル務

朋友ノ交

奴婢ニ對スル務并主長ニ對スル務



第六篇

國に對スル務

租稅ヲ納ムル事

兵役○報國志

膽志

士民自由ノ權○所有ノ權

人其職分ニ就テノ道

貧富貴賤ノ別

德ニ進ムノ法○「フランクリン」ノ教誨

目錄終

泰西勸善訓蒙卷之上

箕作麟祥 譯述

第一篇 勸善學ノ大旨

第一章

勸善學トハ人ノ務ノ學ニシテ其本旨人ヲシテ善ヲ行ハシムルニ在リ

其其人ノ務

勸善學

人ノ務トハ人ノ為ス可キ事ヲ云フ故ニ人其務

ヲ行フトハ勸善學ノ教フル所ヲ為シ其禁スル



所ヲ避ルヲ云フ學ハ格ニハ所ニ於テ其禁スル  
人ハ格第三章ハ格ニ於テ事ニ於テ其禁スル人其禁

勸善學ハ確然不拔ノ規則ヲ基トスル所ユレテ  
其規則ハ萬民ノ之ヲ尊ミ之ヲ學フ可キモノト

善トハ道理ニ合ヒ勸善ノ教ニ從フヲ云フ  
羅馬ノ大學士シロセ曰ク善ハ惡ノ反對

ニシテ天ヨリ人ニ教エタル萬世不易ノ  
道ナリ天ハ人ヲ創造シ人ヲ賞罰スルニ

皆善道ヲ以テス

皆善道ヲ以テス

善ハ即チ正直ナリ正直ハ即チ善ナリ

善ハ常ニ人ノ利益ヲ為シ又ハ人ノ歡娛ヲ助ク

ルモノナラズ往々善ヲ行フニ勞苦ヲ生スル

コトアリモリ然レドモ至ルニ善ハ古ク

惡トハ勸善ノ教ニ背キタルヲ云フ善蓋ハ天下

第五章

凡ソ兒童其父母ノ教諭ヲ守リ其師傅ノ訓誨ニ

從フ時ハ常ニ善惡ヲ別テ其務ヲ行フコトヲ得可

シスハ所ニ於テ人惡ニ及テハ父母又ハ師傅ヨリ

兒童其成長スルニ及テハ父母又ハ師傅ヨリ知受

ケタル教誨ニ因リ天ヨリ得タル智ヲ増シ漸々



自カラ善惡ヲ分別スルヲ得ルニ至ル  
人善ヲ為シ其友ヲ助クル時ハ意中自カラ快シ  
トスル所アリ○人惡ヲ為シ朋友ニ害ヲ加フル  
時ハ必ス悔心ヲ生シテ意中自カラ羞ヲ懷キ首  
ヲ低レテ父母師傅ノ譴責ヲ懼レ其膝下ニ出ル  
ヲ避ク

法國ノ學士ラレイシノ曰ク善道ハ天子  
ヨリ庶人ニ至ル迄皆之ヲ守ル可ク古今  
萬國變易ス可カラサルモノナリ  
善ハ良心及ヒ善惡ノ分別又ハ人ノ性  
善ハ阻第六章

善惡ヲ別ツ心ヲ良心ト云フ

第七章

善惡ヲ別タントスルニハ左ノ教ニ從フ可シ曰ク  
己レノ欲セサル所人ニ施ス勿レ

第八章

人善惡ヲ別チ善ハ勸善ノ道ニ合ヒ惡ハ勸善ノ  
道ニ背クヲ知ルノ齡ニ至リシ後ハ自カラ善ヲ  
勉メ惡ヲ避ク可シ

第九章

徳不徳

人常ニ其務ヲ行フヲ徳ト云フ○徳ヲ行ハント



スルニハ情欲ノ私ニ陷イルヲ防クカヲ要ス故  
ニ人惡ヲ去ケテ善ニ遷リ正直ノ人タラシテ欲  
スルニハ剛志アル可シ

第十章

不徳ハ常ニ惡ヲ為スヲ云フ

第十一章

人其良心ヲ以テ善惡ヲ分別ス  
蓋シ人情欲ノ惑ニ因リ又ハ過テ良心ヲ失ヒ惡  
ヲ為スヲアリト雖モ精神靜定シテ再ヒ良心ノ  
生スル時ハ如何ニ邪惡ノ人ト雖モ其良心ニ因  
リ己レノ惡ヲ為シタルヲ知ルニ至ル可シ

人苟モ忿怒憎惡怨恨大醉等ニ因リ其良心ヲ失  
フ勿レイカリニシミウラミ大ヤルヲ入其致マ思チハ惡マ  
入其致第十二章ムシクニシテ善マ為ス  
人故ラニ其良心ニ背キ行フタル過失ハ之ヲ恕  
ス可ラス是レ自カラ其良心ヲ失ヒレ罪アルニ  
因レハナリ

勸善ノ道唯一ナル事

第十三章

勸善ノ道ハ唯一ニシテ百般人ノ為ス可キ所ヲ  
教ユ善ト正トハ確然一定ナリ時ト人トニ隨ヒ  
之ヲ易フ可カラス



第十四章

人ノ天ニ事フル道ヲ教ユルハ勸善ノ一部ニシテ之ヲ敬天ノ教ト云フ

剛志柔志

第十五章

人總テ善ヲ為スノ阻礙トナルモノニ克チ道ニ從フヲ剛志ト云フ  
人其情慾ニ誘曳セラレ道ニ背クヲ柔志ト云フ  
人其忍ヒ難キヲ忍ヒ行ヒ難キヲ行ヒ善ヲ為スハ剛志ノ大ナルモノナリ人其避ケ易キノ惡ヲ為スハ柔志ノ甚シキモノナリ

故ニ人ハ皆道ヲ守ル者ヲ尊重シテ道ニ背キ其慾ヲ達スル者ヲ譴罰ス可シ

第十六章

人ハ稱譽ヲ求ムルノ意ナク己ノ務ヲ行フノミヲ旨趣トシテ勸善ノ規則ニ循ヒ善ヲ為ス可シ又譴罰ヲ恐ル、ノ意ナクシテ惡ヲ避ク可シ  
心中ニ人ノ財産ヲ掠奪セント欲スレハ只繫獄ノ罰ヲ懼レ其惡ヲ行ハサル者ハ其天ニ背クト既ニ盜ヲ行フタルト同罪ナリ  
十誡ノ一ニ曰ク盜ヲ行フハ固ヨリ言ヲ待タス人ノ財産ヲ掠奪セントスル念ヲ生スルモ亦道



二背クモノトスト

第十七章

人ノ所行ノ善惡ハ其意ノ善惡ニ因ル故ニ善ヲ為スノ意ナクシテ偶然行ヒタル善ハ剛志アリテ之ヲ為シタルト稱譽スルニ足ラス

第十八章

人ノ行勸善ノ道ニ合フニハ其行ノ善ナルヲ以テ足レリトセス善ヲ為スノ意ヲ以テ之ヲ為スニ在リ

我若シ人ニ害ヲ加ヘントスルノ意アル時ハ現ニ其害ヲ加ヘズト雖モ我ニ於テ罪アリ

希臘ノ學士「エリアシ」ノ曰ク

不直ノ所為ヲ行フタル者ノミ惡トス可カ

又因レテ其行フノ意アル者モ亦惡トス可シ

人ノ事ヲ為スハ其旨趣ト之ヲ達スルノ方法ト

兩ナガラ善ナルヲ要ス譬ハ人ノ患苦ヲ救ハ

シトシテ其人ヲ殺サハ道ニ合フト謂フ可カラ

ス是レ其旨趣ハ善ナリト雖モ其方法ノ善ナラ

サルニ因レハナリハ昔ハ諸國ノ事ハ

又如何ニ有益事ト雖モ不直ノ行ハ之ヲ禁ス

○昔レ「アテニス」國ノ人「スパルタ」ト戰ヒレ時竊

ニ敵ノ兵艦ヲ燒燬スノ奇計アリシカ「アリ」スチ



テスト云へル人ノ説ニ從ヒ之ヲ不直ノ事トレ  
 益アリト雖モ終ニ行ハサリレトナリ  
 又此第十九章事ハ不直ニ行ハサレモ禁ス  
 勸善ノ規則ハ人タル者ノ諸般ノ務ヲ教ユルモ  
 ノナリ故ニ國ノ法律ヨリ更ニ嚴密ニシテ恩惠  
 信義敬天等ノ事ハ國法ヲ以テ定メタル所ニ非  
 ラス是勸善ノ規則ニ於テ人ノ務ト為ス所ナリ  
 又國ノ法律ヲ以テ禁スルヲ能ハサル過失ヲ勸  
 善ノ道ニ於テハ禁止スルヲ多ク即チ國ノ法律  
 ハ人ノ惡意ノミニシテ實際ニ發セサルモノニ

罰ヲ加フルヲナク又過度貪食ハ禁スルヲナシ  
 ト雖モ勸善ノ規則ニ於テハ之ヲ禁止スルノ類  
 ナリ此ニ由テ推考スレハ國ノ法律ノ禁セサル  
 所ト雖モ勸善ノ道ニ於テ禁止スルモノ居多ナ  
 リトス

第二十一章

人ノ良心ハ天ヨリ稟ケタル所ナリ故ニ勸善ノ  
 基本ハ天ニ在リ

第二十二章

勸善ノ道ハ天ヨリ授ケタル所ナリ故ニ人其命  
 スル所ヲ為サル可カラス又此道ハ人ノ情慾



利害ニ因テ易フ可カラス若シ其教ニ背ク者ハ  
必ス其咎ヲ受ク

法蘭ノ學士<sup>シ</sup>モシノ曰ク

若シ勸善ノ道人ノ設立セシナラハ吾之  
ヲ論シテ或ハ其教ニ從ヒ或ハ其教ニ背  
キ我利害得失ヲ計リテ隨意ニ之ヲ取捨  
ス可シ然ルニ此道ハ天ヨリ命シタル萬  
世不易ノモノニシテ人之ヲ守ラサル可  
カラス縱令之ヲ忌ムト雖モ其教ヲ易フ  
ルヲ能ハス  
人ノ務ノ種類

三 天第二十三章

人ノ務ヲ分テ三種トス

一 天ニ對スル務

二 自己ニ對スル務

三 因人ニ對スル務

第二篇 天ニ對スル務

敬天之道

第二十四章

凡ソ宇宙ニ萬物アルハ天アルノ証ニシテ天ハ  
即チ造物ノ生ナリ夫レ千種萬類ノ創造ヨリ日



月星辰ノ空ニ懸リテ旋轉シ人獸草木ノ地ニ在  
テ生動スルニ至ルマテ皆各自カラ為スニ非ス  
皆天ヨリ出ルナリ喻ヘハ猶佳麗ノ園庭奇巧ノ  
家室ニ入ル者必ス老手ノ園疋之ヲ修メ最良ノ  
匠人之ヲ建ルヲ知ルカ如ク苟モ此世ニアルモ  
ノ此宇宙萬物ヲ創造シタルハ皆至靈至妙ノ天  
工ニ因ルヨリ知得セサル可カラス

第二十五章

- 一 天ニ始終ナク又變更ナシ
- 二 天ハ全能ニシテ其欲スル所能ハサルナシ
- 三 天ハ純全ニシテ全恩ヲ施ス

四 天ハ純正ニシテ賞罰ニ過チナシ

第二十六章

宇宙ノ萬物ヲ創造シタルハ皆天ニ因ル故ニ人  
造物ノ主アルヲ信セサル可カラス人ノ萬物  
ヲ見テ造物ノ主トシト謂フハ恰モ夫ノ家屋園  
庭ヲ見テ之ヲ造リシ者ナシト謂フカ如シ

第二十七章

天ハ全能純正ナレハ最モ之ヲ尊崇ス可シ

第二十八章

天ヲ拜スルハ其純全ニシテ全能ナルヲ尊ムニ在リ

第二十九章



天ハ人ニ性命ヲ賦與シ且ツ常ニ人ノ性命ヲ保  
護ス是レ其全恩ヲ施ス所ナリ

天ハ人ニ福ヲ授ケ人ニ幸ヲ與フ故ニ人之フ敬  
戴セサル可カラス

第三十章

天ハ純正ナリ故一人天ヲ仰キテ憂悶ノ意ナク  
常ニ天意ニ依頼シテ天ヨリ我ノ欲シ我ノ好ム  
所ヲ授クルヲ待ツ可シ

第三十一章

天ハ視サル所ナク知ラサル所ナシ故ニ其善ヲ  
賞シ惡ヲ罰スルヤ必セリ

人ハ常ニ人ノ為ス所ノ善ヲ周ク知得スルヲ能  
ハス故ニ人ノ善行ヲ賞スルニ遺漏アリ又人ノ  
曲直ヲ分ツニ必ス皆正キニ出ルヲ得ス唯天  
ハ視サル所ナク知ラサル所ナキカ故邪正ヲ混  
同スルヲナク必ス善ヲ賞シ惡ヲ罰スルモノナ  
リ故ニ兒童ハ苟モ其父母師傅ノ面前ニテ忌憚  
ス可キ惡業ヲ竊ニ為スル勿レ若シ竊ニ之ヲ為  
ス母令父父母師傅ノ眼ニ觸レスト雖モ必ス無  
所不在ノ天ノ照覽ニ因リ其罰ヲ受ク可シ

第三十二章

天ハ純正ナル賞罰ノ基源ナリ若シ天ナケレバ



天ノ惡業ヲ周ク譴罰スルヲ得ス  
天意

第三十三章

天ハ宇宙ノ千種萬類ヲ創造シタルノニ非ス  
創造ノ後常ニ之ヲ統合シ天意ニ非レハ百事成  
就スルヲナレ○天其造リタル萬物ヲ保護シ且  
ツ之ヲ制御スルヲ天意ト云フ  
古ヨリ人ノ天ヲ敬拜シタルハ現今ニ異ナラス  
是レ昔人皆天意ノ已ヲ保護スルヲアルヲ知レハナリ  
人ノ天ヲ仰キ見テ其慈惠ヲ乞フハ是レ自カラ  
天ノ已ヲ照管保護スルヲ知レハ大分スルヲ

第三篇 自己ニ對スル務

第三十四章

人ハ身體ト精神トニ因リ成ル者ニシテ能ク善  
惡是非ヲ分別ス

第三十五章

人ハ萬物ノ靈ナレハ善ヲ為シ惡ヲ避ケ以テ世  
ヲ齊治ス可シ  
人今文明開化ノ日ニ増シ月ニ進ム盛世ニ生レ  
タルヤ其天ヨリ授カノタル知識ヲ研キ己ノ身  
ヲ脩メ以テ世ノ裨益ヲ為ス可シ

第三十六章



人其為ス可キ務ヲ盡ク行ヘハ是レ即チ天意ニ  
合ヒ天ヨリ命セラレタル務ヲ成就シタルト謂  
フ可レ  
第一款 自己ノ身體ニ對スル務  
第三十七章  
人ノ身體アルハ其精神ノ欲スル所ヲ行フ為メ  
ナリ故ニ勉メテ之ヲ全ウセサルヲ得ス

第三十八章  
身體ヲ清潔ニ為スハ健康ヲ保ツノ一基本ナリ  
故ニ之ヲ自己ニ對スル務ノ一トス  
第三十九章

人其飲食ヲ節スルハ其情欲ヲ制スル徳ノ一ナ  
リ若シ之ヲ節スルコトナク貪飽スル時ハ其健康  
ヲ害シ疾病ヲ醸シ身體ノ機關ヲ損スルニ至ル  
可レ是レ天ニ背クノ一不徳ナリ  
昔シ希臘ノスパルタ國ニテハ怠惰貪食等ニ因  
リ身體ノ微弱トナリシ兒童ヲ鞭撻シテ懲治シ  
タルコトアリト云フ

第四十章  
人其天ヨリ授カリタル身體ノ巧妙ナル機關ヲ  
保全セント欲スル時ハ之ヲ毀傷シ又ハ之ヲ壞  
滅ス可カラス



人自カラ其肌膚ヲ傷ヒ其一指ヲ截ルカ如キモ  
皆其身體ヲ毀傷スルモノナリ又ハ  
法蘭西ニテハ兵役ヲ避クルカ為メ故ラニ病ヲ  
醸シ又ハ其體ヲ創傷スル者ヲ一月乃至一年ノ  
間獄ニ繫クノ律アリ是亦勸善ノ教ニ吻合スル  
モノトス  
第四十一章  
自裁ハ人其身體ヲ毀傷ス可カラサルト同一理  
ニシテ最モ之ヲ嚴禁トス然レモ窮乏ニ迫ルト雖  
人如何ニ汚辱ヲ受ケ如何ニ窮乏ニ迫ルト雖  
自裁ヲ為ス可カラス其計略ハ歸スルハ一

人ノ性命ハ天ヨリ授カリシモノニシテ家國ノ  
為メ之ヲ保全スルヲ必要トス故ニ人恣ニ自カ  
ラ之ヲ害スルヲ得ス  
凡ソ人ノ此世ニ在ルヤ百般ノ困難窮厄ヲ經テ  
其務ヲ行フ可キモノナリ故ニ一旦ノ汚辱窮厄  
ニ堪ヘスレテ自裁ヲ為スハ是レ天意ニ悖リタ  
ルコトニシテ之ヲ志氣ナキモノトス  
第四十二章  
惡人ハ國ノ為メ益ナキノミニ非ス往々人ノ禍  
害ヲ為ス故ニ之ヲ獄ニ繫キ或ハ之ヲ死刑ニ處  
スルコトアリ又善人ハ常ニ國ノ為メ益アルモノ



テ若レ災厄病患ニ罹リ人ヲ救助スルヲ能ハサルニ至ルト雖モ能ク其災厄病患ニ耐ヘ終ニ他人ノ行ヲ裨益スルノ規範トナル可シ故ニ自裁ハ其為ス可キ所ニアラス能ク自カラ其身ヲ保全ス可シ

第四十三章

人ノ自裁ハ嚴ニ之ヲ禁スルト雖モ人其務ヲ行フニ當リ若レ死生ヲ顧ミルヲ得サル事アル時ハ必ス死ヲ懼ルハノ心ナク其務ヲ行フ可シ故ニ士卒ノ軍令ヲ守リ畏怖ノ意ナクシテ萬死ヲ冒シ醫官ノ傳染病ヲ恐レシテ病者ヲ療ス

ルカ如キ皆其務ヲ行フナリ此等ノ際ニ於テ死ヲ懼レ逃竄スル者ハ之ヲ怯懦ナリトス

第四十四章

人其身體ヲ壯健ナラシメントシテ却テ意ヲ用ルニ過キ終ニ其身體ヲ柔弱ナラシム可カラス故ニ常ニ身體ヲ運動使用シテ之ヲ強健ニ為シ疲勞困苦ニ堪ヘシム可シ

第四十五章

凡ソ蹴鞠術ノ如ク身體ヲシテ強壯輕捷ナラシムル遊戯ハ無益ノ遊戯ニ比スレハ大ニ貴重ス



可キモノトス

第四十六章

人ノ務ニ於テ惰ル可カラサル至重ノ技藝中其一ハ洒術ナリ若シ人自カラ惰リ又ハ畏懼シテ之ヲ學ハサル時ハ其咎アリ  
洒術ヲ知ラサル者ハ免ル、ヲ得可キ水難ニ其命ヲ失ヒ又救援ス可キ人ヲモ扶クルヲ能ハサルノ罪アリ

第四十七章

遊戯中鬱懷ヲ消散シテ身體ヲ强健ナラシムルニ益ナキモノアリ是レ人ノ慎ンテ避ク可キモ

ノトス總テ賭博ノ遊戯ハ此類ナリ  
兒童ハ貴賤ヲ問ハス賭博ノ遊戯ヲ為シテ財貨ヲ玩フ可カラズ總テ節約ノ方ニ習ヒ少シノ財貨モ之ヲ貯フ可シ若シ之ヲ貯フル時ハ終ニ其身ノ為メ族人ノ為メ大益ヲ為ス可シ  
賭博ハ人ヲレテ詐心ヲ生セシメ怠惰ニ陥イラシメ又甚シキハ盜ヲ為スニ至ラシム故ニ善良ナル兒輩ハ必ス此惡習ニ浸染スルヲ勿レ若シ之ニ浸染スル時ハ其師傅朋友ノ賤ミヲ受ケ其家名ヲ辱ム可シ

第四十八章

可キモノトス



人其飲食ヲ節シ身體ヲシテ勞動ニ習慣セシム  
必ハ是レ其身ヲ壯剛ニ為スノ良法ナリ  
身體壯剛ニシテ疾病ナキ時ハ其精神ヲシテ亦  
爽快ナラシメ身體精神皆勸善ノ務ヲ行フヲ得  
可シ

第四十九章

昔希臘ノ歴山王祭祀ヲ行ヒシ時其側ニ侍スル  
一少年香爐ヲ捧ケ過テ火片ヲ其手ニ墮シ苦劇  
ニ堪ヘサルノ色アリ然レ王ノ祭祀ヲ妨クルヲ  
恐レ黙シテ動カサリシトナリ  
此少年ハ斯ク王ノ祭祀ヲ崇敬スルヲ知り其身

ノ苦劇ニ堪ヘタレハ其他如何ニ苦劇ヲ覺ユル  
事アリトモ必ス耐忍シテ懼色ナク國ノ為メ身  
ヲ顧ミス死地ヲ踏ム可シ

第五十章

人己ノ身體ヲシテ惡習ヲ得セシムル時ハ精神  
其命ノ如ク身體ヲ御スルヲ能ハサルニ至ルノ  
害アリ  
人其休憩ノ爲メ多ク時ヲ費スルヲ怠惰ト云ヒ胃  
腑ヲ欲ヲ恣ニスルヲ貪食ト云フ此ニ不善ハ他  
ニ不善ヲ生スルノ源ナリ故ニ過眠飽食ハ人之  
ヲ畏慎セサル可カラス



人其身體ヲシテ久ク精神ノ命ニ背クノ習ニ浸  
染セザルハ此時ハ如何ニ精神良善ナリト雖モ終  
其身體ヲ使用スルヲ能ハサルニ至ル是レ御  
者其久ク悍馬ヲ調治セスレテ竟ニ驅使スルヲ  
能ハサルニ至ルニ等シ  
其命、第五十一章  
歴山玉ハ向フ所敵ナク諸國ヲ征服シタル英雄  
ナリシカ己ノ嗜慾ニ克ツテ能ハス暴飲ノ爲メ  
終ニ其命ヲ隕スニ至レリ  
第五十二章  
人父母師傅ノ教誨ヲ忽ニシ一度其慾情ヲ恣ニ

スル時ハ惡習常トナリ後之ヲ改メント欲スル  
モ甚々難ク終ニ異常ノ剛志ヲ要スルニ至ル故  
ニ我務ヲシテ遺忘スルニ至ラレムル惡習ハ其  
初メテ萌スル時之ヲ預防スルヲ最良ノ法トス  
第五十三章

大醉ハ最モ戒慎ス可キ不善ノ一ニシテ醉中ニ  
為ス所ハ醒後悔ユルヲ甚々多シ總テ大醉スル  
者ハ禽獸ニ等シク其爲ス所ノ恥ツ可キヲ知ラ  
ス  
大醉ハ人ノ不善ヲ増ス而已ニ非ス更ニ人ヲシ  
テ曾テ心ニ有セサル不善ヲ生セシム



故ニ常ニ大醉シテ其本心ヲ失フ者ハ人之ヲ賤  
シ又醉ニ乘シテ律法ニ背キシ事ヲ為ス者官  
ヨリ之ヲ罰スルハ至當ナリ

第二款 自己ノ精神ニ對スル務

第五十四章

人ノ精神ハ天ニ倣ヒ造リシモノニシテ身體ヲ  
活動セシムル無形無體ノ永遠不朽ナルモノヲ  
云フ

第五十五章

禽獸ハ自然ノ慾情ノミニシテ變更スルコトナク  
萬古百世常ニ同一ナリト雖モ人ハ之レニ異ナ

リテ靈妙ノ心アリ其靈妙ノ心ハ又學業熟思勉  
勵等ニ因リ更ニ之ヲ良善ニ為スヲ得ルモノト  
ス○故ニ人其靈妙ノ心ヲ啓發シテ學業ヲ勉メ  
其知識ヲ増シ以テ天ニ對スルノ務人ニ對スル  
ノ務自己ニ對スルノ務ヲ十分ニ行ヒ得ルニ至  
ルヲ要ス可シ

第五十六章

人ハ學業ト勉強トニ因リ其精神ヲ良善ナラレ  
△可キノ務アリ故ニ行ヲ亂ス可キ書ハ言ヲ待  
タス戲ニ無益ノ書ヲ讀ミ時日ヲ費スハ之ヲ禁  
ス



善書ヲ讀ム時ハ人タル者ノ務ヲ勵マレ不善ノ書ヲ讀ム時ハ人ノ志氣ヲ損耗シ人ヲ懦弱ニナシテ是非善惡ヲ分別スルノ心ヲ錯亂ス故ニ不善ノ書ヲ讀ムハ人ノ務ヲ怠ル者ト云フ可シ

第五十七章

自他ノ差別ナク總テ有益ノ勤勞ヲ為ス可キ為メ光陰ヲ用フルハ人タル者ノ務ナリ故ニ無益ノ勞動ヲ為シテ時日ヲ費ス勿レハ無益ノ知識ノ論訓ニ曰クハ公ニ益シテ私ニ損スル者ハ無益ノ事業ニ時ヲ費ス勿レ言語ヲ少クシテ時日ヲ費サハ智者ナリト

人有益ニ光陰ヲ用フルハ其務ナリト雖モ自カラ亦休憩歡樂ヲ為サルヲ得ス蓋シ休憩歡樂ヲ為スニハ精神ト身體トヲ懋ヒ其精カヲ増シテ新ニ勤勞ヲ為ス可キヲ旨趣トス可シ

第五十八章

遊歩運動ハ精神ヲ休憩スルノ最良法トス

第五十九章

善書ヲ讀ム心ヲ慰サムルハ身體ヲ休憩スルノ最良法トス

第六十章



勞動ハ天ヨリ入ニ命スル所ニシテ人ハ自カラ  
 勞動シテ他人ノ為メ益ヲ為ス可シ故ニ尊卑ヲ  
 問ハス人皆勞動ヲ以テ務トス  
 勉勵シテ衆庶ヲ裨益ス可キ勞動ヲ為ス者ハ衆  
 庶モ亦之ヲ敬シ又之ヲ稱ス  
 故ニ怠惰安逸ハ最モ人ノ務ヲ損スルモノニシ  
 テ此不善アレハ必ス亦他ノ不善ヲ引出ス可シ  
 人若シ怠惰安逸ナレハ終ニ虚誕竊盜淫行等ノ  
 不善ニ陷イル可シ  
 惰者ハ天ニ對スル務自己ニ對スル務人ニ對ス  
ナシケモノ  
 ル務ヲ一モ行ハサルニ至ル故ニ人ハ年少ノ時

ヨリ勉勵勤學ノ習慣ヲ得テ天ヨリ命スル所ヲ  
 成就スルノ方法ヲ勉ム可シ  
 兒童教訓ノ語ニ曰ク  
 汝三十歳ニ至ラハ必ス遊惰ヲ悔イ勉業  
 ハ享福ノ至大ナルモノタルヲ悟ル可シ

泰西勸善訓蒙卷之上終



龍華訓蒙前

卷上

一不古屋島木



